

民族資格試験!?

柳本通彦

台湾に現存する12の原住民族の40種の民族語を網羅する母語教材と教師の手引きが初めて完成し、さる9月22日、台湾の教育部から発表された。その数、義務教育9年分720冊に達する。

母語教育という言葉が初めて聞いたのは、10年以上前のことである。台湾では戦後、台湾人としてのアイデンティティを否定する教育が行われてきたが、90年代に入り、中国国民党による独裁体制が終焉すると、台湾に空前の台湾ブームが訪れる。台湾史を発掘する本が次々に出版され、ホーロー語(閩南語の一派)の歌がヒットし、レトロチックなレストランが流行った。そうした社会の変化を感じた原住民の先生や牧師の中から「母語教育」という言葉が囁かれ始めたのである。当初彼らは、自らの手で教科書作りに取

り組んだ。しかし、その前途にはさまざまな困難が横たわっていた。文字を持たない人びとは、まず言葉をアルファベットに置き換えねばならなかったし、言葉は一民族一言語とは限らなかったのである。

この10年あまり、母語教育の義務化、原住民子弟の教育支援体制の整備、原住民および客家テレビ局の創設など、マインオリティに配慮した政策が着実に積み上げられてきた。そしてさらに、プロジェクトチームによつて準備されてきた母語教材がついに完成したのである。これらはすぐに直接学校で使われるわけではない。当面は「資格試験」の基準となるものである。いったい「資格試験」とは?

台湾の原住民は全人口の2%およそ40万人といわれている。しかし、異



不自由な身体をおして教材を編んだ林豪勳氏

民族間の結婚が急速に進み、漢民族と原住民、また原住民の中での民族の区別が困難になってきた。簡単に言えば、A民族とB民族を両親に生まれた子供は何民族なのかということである。

そこで導入されたのが民族資格言語能力試験である。原住民優遇政策の対象を各自の母語能力によつて選別しようという政策で、例えば、高校・大学の入学試験において、この試験に合格すると35%も下駄を履かせてもらえることになる(一般原住民は25%)。政策の是非はともかく、信頼できる教材ができたことは民族文化の保護にとつて大きな第一歩となる。

教育部は、このシリーズの発表と同時に、編纂に携わった人びとの紹介をおこなった。そのなかの台東プユマの

項目に林豪勳氏の名をみつけた。

プユマの音楽家、イサオこと林豪勳氏については本誌06年1月号にご紹介したことがある。事故によつておよそ30年間寝たきりの生活を続けていたが、パソコンと出会うことによつて、民族伝統の音楽の記録と再生に取り組み始めたことや招かれて日本へ講演に出席することなどをお話した。

しかし、それからまもなくの4月15日、彼は敗血病のために自宅で急逝した。彼が箸を口にくわえてキーボードを操ることを覚えたとき、最初に取り組んだのはプユマ語の辞典をつくることだった。それから十数年の歳月を経て、最近、彼は政府の要請でプユマ語の教材の編纂に取り組んでいた。そしてその完成を見ることなくこの世を去つたのである。今回発表された母語教材は、まさに林豪勳氏の遺産のひとつとなった。彼が一字一字著の先で打つたアルファベットが民族の言葉に永遠の生命を吹き込んだとも言える。

やなぎもと・みちひ
京都市生まれ。99年度「潮賈」ノンフィクション部門優秀賞受賞。著書に「台湾先住民・山の女たちの聖戦」(現代書館)「台湾革命」(集英社新書)「明治の冒険科学者たち」(新潮新書)など。最新刊に「ノンフィクションの現場を歩く 台湾原住民族と日本」(かわさき市民アカデミー出版部)